

尊敬敬語法助動詞「～ラレー」の 言語地図年代学的研究

江 端 義 夫

(2006年10月5日受理)

A Chronological Study of Linguistic Atlases on an auxiliary verb, "RAREE"

Yoshio Ebata

In this paper, I am trying to describe on a method of "A Chronology of Linguistic Atlas". We have been studying the Dialect Geography for a long time. The works of it's historical interpretation have based on the supposition about the dialect distribution.

Every person knows that a word changes always itself. But we have discussed the history about the only one atlas which had surveyed with colleague's help. Is the ABA theory really true? I think that the hypothesis is not so scientific. We should examine with dialect field surveys of the many ages, many times and many eras. We should compare these linguistic atlases with every decade. If we can study the dialect atlases each other, we will be able to draw the exact process of changement of the dialects. We should establish the method of the absolute interpretation without using both the ABA theory and the wave theory. In the world, the author has offered a new method on the Geolinguistic world. That is called "A Chronology of Linguistic Atlases" or "Linguistic Atlas Chronology." It is the first event that introduced into the world. It has contained enormous possibility to extend the dialect study in future.

key words: chronology of linguistic atlas, geolinguistics, linguistic geography, dialectology, an auxiliary verb; RAREE:

キーワード：言語地図年代学，地理言語学，言語地理学，方言学，助動詞，～ラレー

はじめに

本稿の目的：

本稿では、筆者が、世界で最初に開発した「言語地図年代学」について、その概要を具体例に即して説明し、それが、言語史を解明するために、斬新で有効な方法であることを提案する。

10年間隔で同じ地域を7回にわたって調査し、各回毎に言語地図を作ってきた。年層差、時代差、地域差毎に言語の分布が動く様態が確実に追跡できる。今回は、7回の中の4回分だけを例示する。取り上げる項目は、尊敬の助動詞「～ラレー」の言語地図4枚である。

一 言語地図の意味するところ

1 地図は三次元の世界

言語地図は、「面」であり、「点」や「線」とは異なる。「面」の持つ特性は、距離があり時間がかかり、自在な方向を選択する自由が有ると共に、規定しがたい気儘さがあるということでもある。既に、言語地図に符号を与えた瞬間から、集団の意志決定について思いをめぐらさなくてはならない現実に出会うことになる。

言い換えれば、「空間」の処理が要るということである。一つの地点を例にとれば、360度の方向に言語の伝播は可能であり、その展開の方向は、歴史的事実の解明が必要であるというべきものである。言語地図

に描かれた必然的な分布の様相を解明するのは、人間の課題である。言語事実の側からの究明だけでは済まないことが多く、言語外の事実を導入しなくては分布の解釈が困難なことは必定である。

政治的な学区が言語分布を支えていることもあれば、川筋の上流と下流との生活圏が言語伝播を支えていることもあるだろう。或いは、話し手の職業が方言の維持と変化に貢献した例もあるだろう。いわば、人間生活の一切が方言の存立と伝播に関わってくると言える。そのような「空間」の要素が持つ意味に立脚して、方言の事実を考えて行かなくてはならない。

2 地図は、「時間」を取り込んだ四次元の世界

同じ符号を言語地図の上で追うと、しばしば、都市に新しい言語が見え、辺境地に古い言語が見えることがある。そういう事例をとらえて、周囲分布とかABA分布とかと称してきたし、そのような分布形態を見るとすぐに、新古の解釈を行うという早合点してきたと言えないだろうか。周囲論が巧く適用できないと直ぐに、逆周囲論だと言って、掌を返すように、解釈を替えていく。推論の上に推論を重ねるので、過重な相対論が乱れ飛ぶことになる。この間の論議に使用されるのは、一回の調査で得られた一枚の言語地図だけであるという貧弱な資料不足が見られることへの反省があるべきではなからうか。

3 グロットグラムは地理を否定した「点」なのに、なぜ「地理」と言うのであろうか？

国立国語研究所の『日本語地図』も『方言文法全国地図』も一度の調査だけの資料に拠る。前者は2400地点、後者は800余地点の調査を行った。それぞれ、多数の調査者による協同調査である。莫大な費用と時間をかけて、数十年の年月を費やしての成果である。

素晴らしい結果が出ている。大いに高く評価されるべきものである。ただし、年層差が知りたいという希望がある。ことばの変化する現実を見たいという願いがある。そこで、グロットグラムが流行することとなったのであろう。恣意的に一本の線を引き、その上に地点を配置して、年齢差を複数取り、年齢別に変化が見えるようにしたものである。あたかも、年齢×地域のように見えるかもしれないが、それは虚構である。怪しむこともなく、言語変化の縮図のように思って、悉くが真似をしたのは、方言の生活から離れ、地理的な空間に基づかない学者の陥りがちな落とし穴である。ところが20年以上も学会の中心的手法としてそれが通用していたのは、面白い。それはグロットグラムが絵画的な図表の面白さを見せる錯覚の妙に拠るからで

あろう。

点を繋いで線と見なした。その線の上に年齢差を持ってきても、空間の言語差は解明されない。無限の「線」が引かれて、無限の年齢差調査が行われなくては、グロットグラム調査は全うされないはずのものである。しかも、一回のグロットグラム調査で、全部が解決したかのように論じて見ても筋が通らない。線は研究者が恣意的に引いた仮説であるからである。その仮説は、たとえば東海道を辿るときには、一級河川に橋が無くても平気で飛び越えて線を引いていく。線を引いてしまえば、その線の上を人が渡り、ことばが伝播するかのごとき錯覚が生まれる。モデルと実態との境目を、もっと注意しなくてはならないはずではなからうか。地理は、必然的な地の理である。

二 複数言語地図の比較

1 愛知県言語地図（老年層図と少年層図）

1966年～1968年に本調査を実施した。ついで1970年から1971年に補充調査を行った。筆者が一人で対象地を歩き、臨地調査を行った。行き当たりばったりで、被調査者を探し、適任者に出会うまで人選をし、土地の生え抜きを探して資料を収集した。ずいぶん手間暇がかかった。しかし、老年層も少年層も、資料の純粋性は高いと言える。最適な被調査者に出会うまで、根気よく人探しに努めたからである。

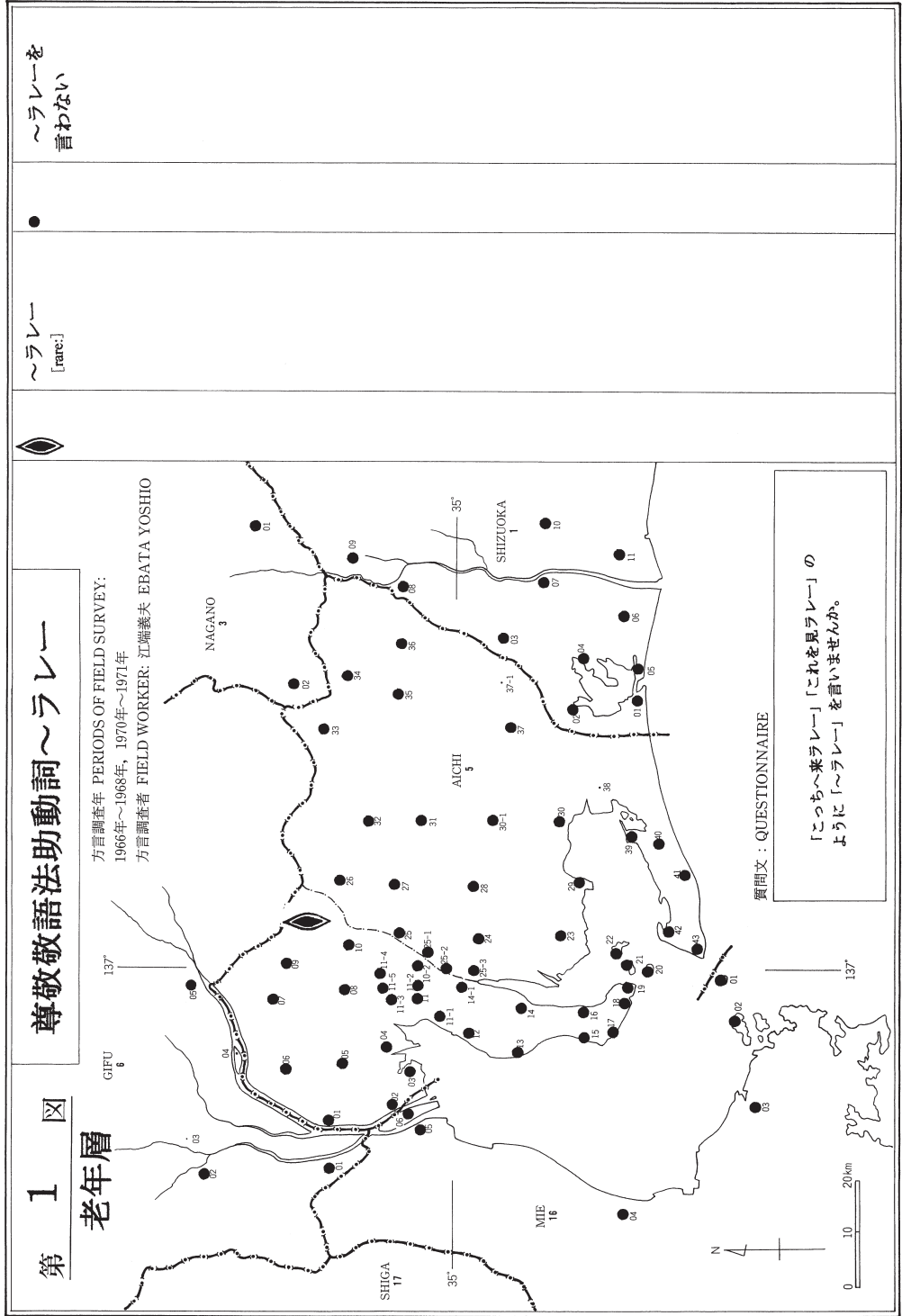
2 中部日本語地図（老年層と少年層）

老年層の臨地調査は、1976年から1977年である。補充調査は1977年から1987年までである。少年層の調査は老年層の本調査が済んでから10年余り経った1989年から1991年にかけて実施された。公務の傍ら、休暇の全部を調査にあてようと努力した。少年層調査では、中部日本の細道を自動車で走った。老年層の調査時には、まだ、地域にバスが通り、鉄道が走っていて公的な交通手段が利用できた。しかし、1980年代になると、地方はことごとく自家用車を利用する生活形態に変化していた。バスも鉄道も殆ど地域から消えていった。したがって、自家用車での調査に切り替える必要があったのである。

老年層の調査は、愛知県言語地図から10年後の1976年に開始した。筆者は世界に前例の無いDecade Surveyという方法を考え出したのである。10年毎に地域を拡大しつつ調査して、言語の動態を言語地図の上で確認すれば、従来の乱暴な「解釈」とか周囲論に偏った「推定」とかで、ものを言う粗さがなくなるだろうと考えたのである。

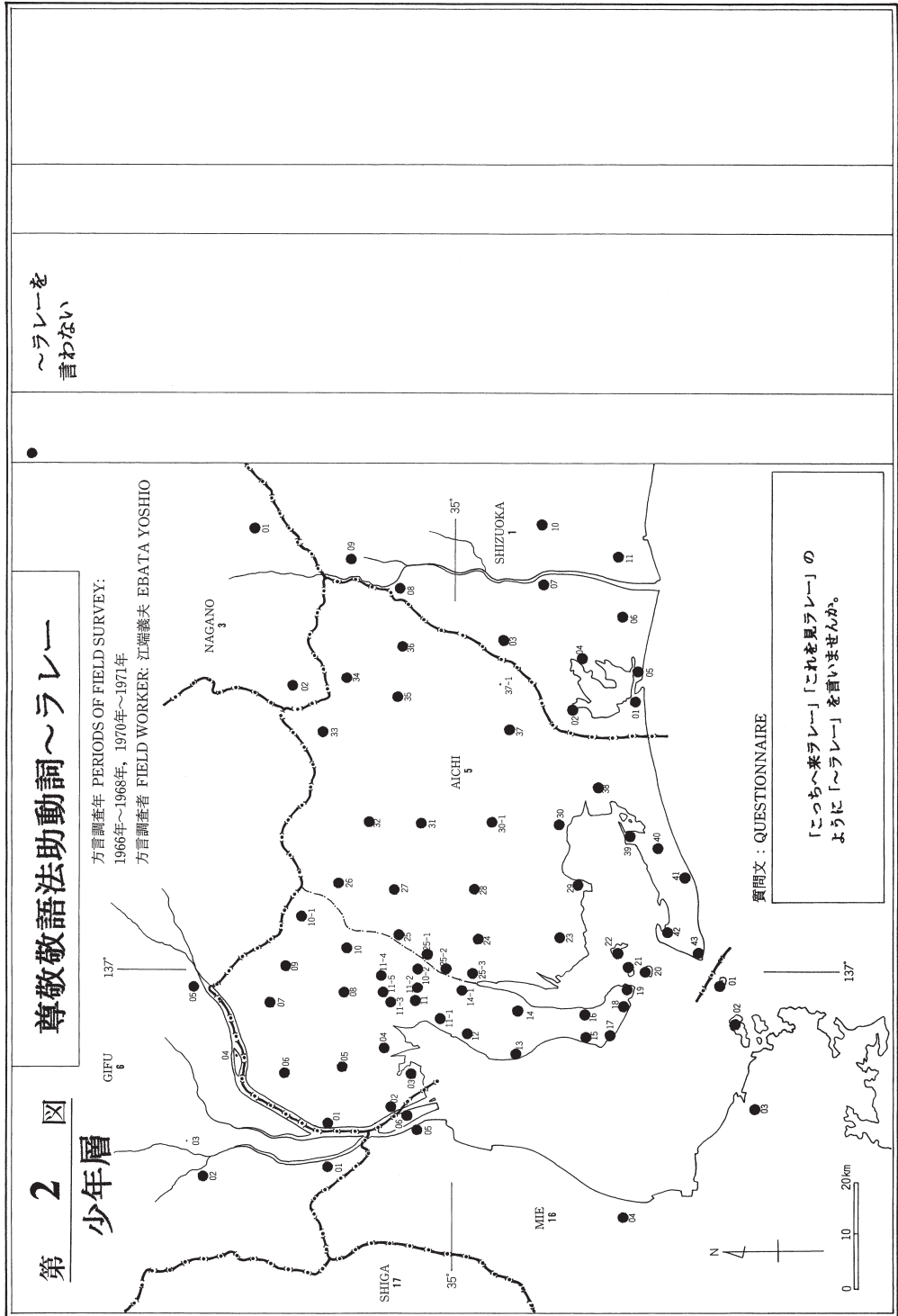
愛知県言語地図

LINGUISTIC ATLAS OF AICHI PREFECTURE



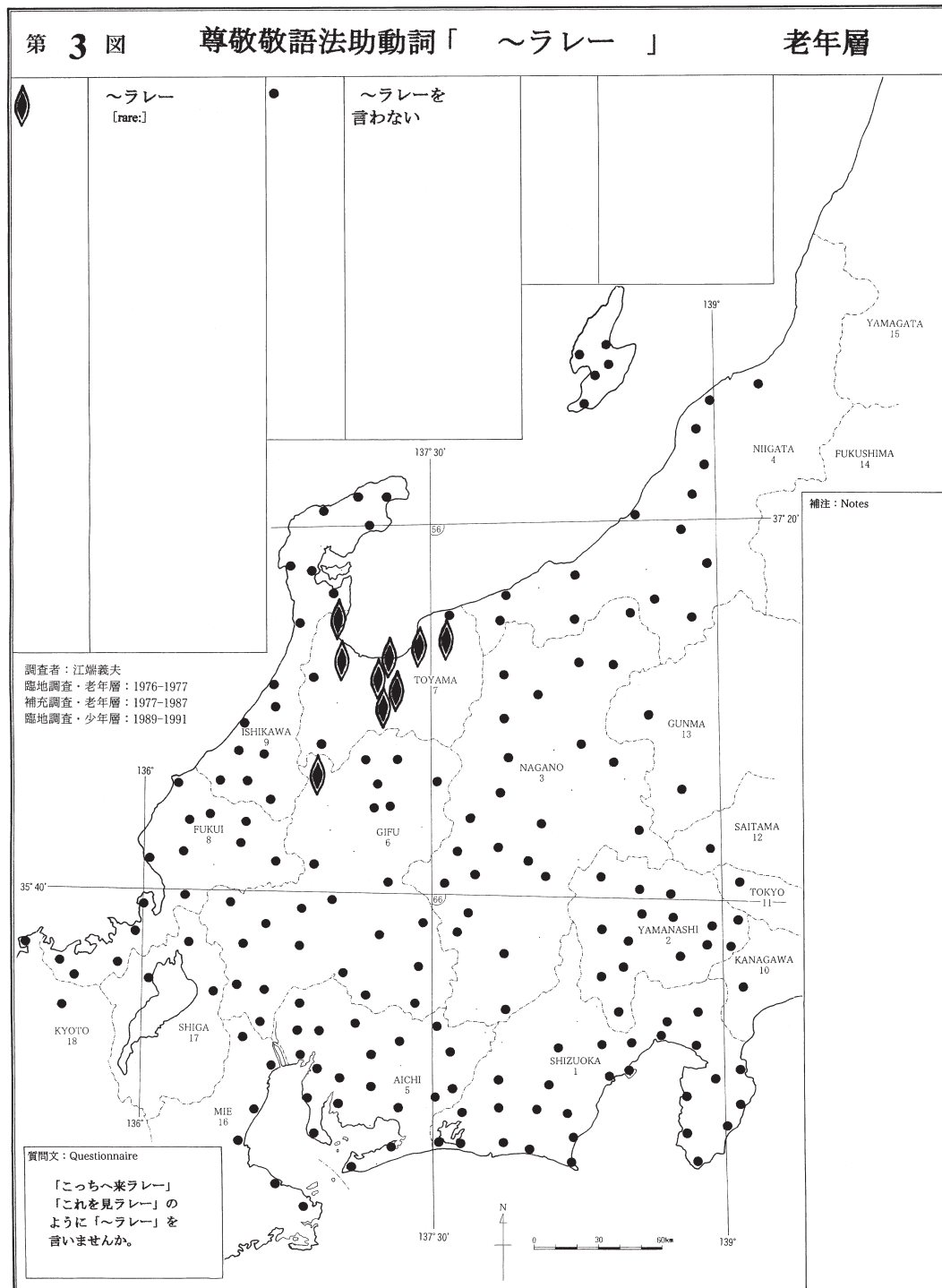
愛知県言語地図

LINGUISTIC ATLAS OF AICHI PREFECTURE



中部日本言語地図 (臨地調査)

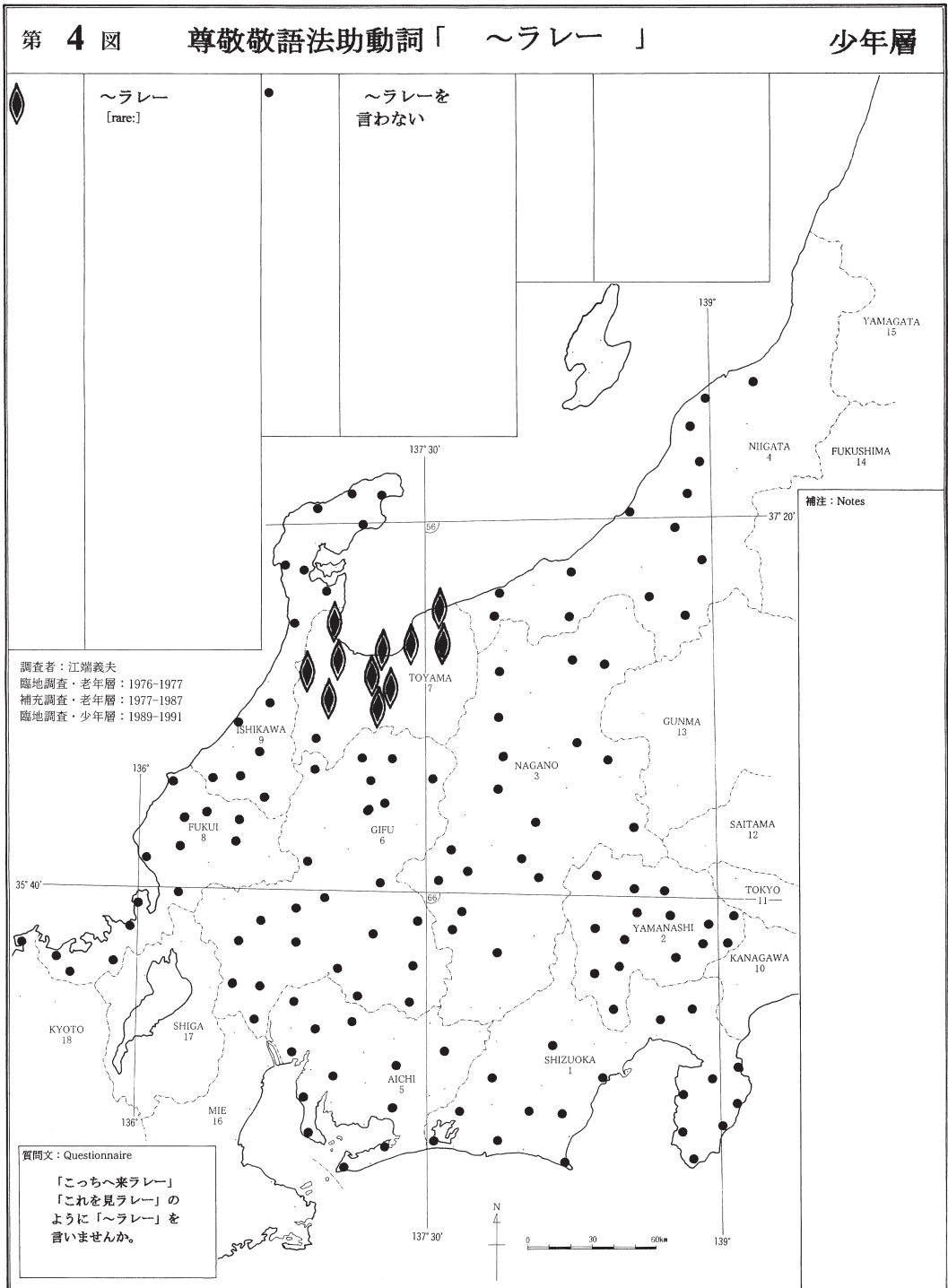
A LINGUISTIC ATLAS OF THE CENTRAL JAPAN (FIELD SURVEY)



中部日本言語地図 (臨地調査)

A LINGUISTIC ATLAS OF THE CENTRAL JAPAN (FIELD SURVEY)

第 4 図 尊敬敬語法助動詞「～ラレー」 少年層



その当時も現在も、まだ、同じ地域を何度も調査して、言語の変化を地図化したという調査報告は聞いていない。みな、一回の調査資料で、その言語分布から統計を用いたり、分布解釈の手順を仮説して「解釈」を展開している。したがって、言語史の推定に種々の説が出て、錯綜する。手抜きせずに、年齢差の言語地図を作れば、たちどころに、実際の変化過程が分かるのに、どうして年齢差の言語地図を作らないのであろうかと不思議にさえ思ったことである。

労力と経済的な負担が大きいかれども、筆者は10年後に同じ調査を繰り返して行った。10年は一昔と言われる。40年間に7回の調査を行った。本当は8回行いたかったが、諸般の都合で予定どおりには行かなかった。しかし、10年ごとに筆者の責任で、日本の各地を歩いて直接に話者から方言を聞き取った。テープおこしをしながら確認をすると、縁側で話し込んだり、放課後の教室の隅で資料を聞きとったりした場面が、反響音とともによみがえる。

言語は変化するけれども、決して、簡単には変化しないものもある。そういう複雑な状況が読みとれる。

三 尊敬敬語法助動詞「～ラレー」の言語年代学的解釈

1 「愛知県言語地図」

第1図 尊敬敬語法助動詞「～ラレー」(老年層)

愛知県の老年層では、瀬戸市の一地点に、「～ラレー」を使うとの回答が得られた。その他は、「～ラレー」を言わないと回答している。周辺の県域にも「～ラレー」の分布は無い。「～ラレー」は、極めて残存的な分布であると言える。

2 「愛知県言語地図」

第2図 尊敬敬語法助動詞「～ラレー」(少年層)

愛知県の少年層では、積極的に「～ラレー」を言う」と回答した地点は皆無である。どこにも「～ラレー」の符号は無い。こういう場合には、柴田武先生は、地図を作らないと言われた。地図を作ってみても仕方が無いとまで言われた。その論理も分からないも無い。分布とは差違性を明示するところに意味があるからである。しかし、一枚の地図だけをたよりにする従来の言語地理学では、それで良かったかもしれないが、十年ごとに違った言語地図を作って、分布が変化した実態を分析する言語地図年代学では、全く分布が消えてしまったという情報が極めて大切な事実なので、分布が無いという言語地図を作成することの意味が十分に存するのである。

3 「中部日本語地図(臨地調査)」

第3図 尊敬敬語法助動詞「～ラレー」(老年層)

中部日本における尊敬敬語法の助動詞「ラレー」の分布は、富山県全域と富山県に接した岐阜県の一地点とに認められるだけである。その他には、全く分布していない。積極的に使用すると回答した地点に限って符号を与えている。

このような状況から判断すれば、愛知県の老年層にも少年層にも「～ラレー」が分布していなかった必然性が理解できよう。では、どうして、愛知県の老年層に一地点だけだけれども、「～ラレー」が瀬戸市に分布していたのであろうか。それは、1994年に調査した時の通信調査でも確認できているけれども、富山県、岐阜県、愛知県、新潟県に散発的ではあるが、「かつて古老が～ラレーを使っていたのを聞いたことがある」という情報を得ている。この敬語法などのような社会体制の根幹にまで関わる文法事項は、わずか40年間という短期間では、全く変化の兆しさえ見えないけれども、かつては、中部日本に広く「～ラレー」が分布していたことを伺わせるものである。きっと、富山県の隆盛な「～ラレー」の言い方は、岐阜県や愛知県にまで、連なっていた時代があったに違いない。そんなことを伺わせるものが感得される。

4 「中部日本語地図(臨地調査)」

第4図 尊敬敬語法助動詞「～ラレー」(少年層)

今から10年ほど前、富山県の少年層は、老年層と全く同じ敬語法を日常の言語生活で行っていたという事実がある。「使う」と回答しているのである。富山県にまとまった分布があるという明示的な言語認識は注目してよい。少年層は、「早く来ラレー」とか「しっかり見ラレー」とか「急いで行かラレー」とかの言い方で相手への行動を尊敬するもの言い仕立てていたのである。

確かに古代の日本では、尊敬の助動詞に「れる」「られる」が頻用されていた時期がある。江戸時代でも、武士が「急いで来られい」と手下に命令している発話を読むことは多い。今日でも「先生が来られたよ」という表現は行われている。しかし、全ての活用形が整っていた時代は過ぎて、いまでは、「れる」「られる」の命令形を具備しないのが共通語の一般になっているであろう。むしろ、助動詞よりも動詞の「いらした」「みえた」「お来しになった」などの言い方に偏していった傾向さえ見える。それに対して、富山県では、老年層も少年層も、「れる」「られる」に拘り、それに執着しきってきたところが特色である。

他方で、富山県では、「早く来いマー」「早く来ラレ

マー」などのように、文末詞の「マー」を添加して人情味を醸し出す工夫もされている。むやみに敬語動詞に移行しなかったところが注目されるのである。

結 論

1 第1図から第4図までの20年間に、尊敬敬語法助動詞「～ラレー」の分布に、年層の変化は見られなかった。つまり、年層差も見られなかったし年代差も見られなかった。地域差も固定していた。すなわち、1966年から1987年にかけての20年間に、「～ラレー」の変化は存在しなかったということが分かる。推定しなくても地図の事実がそれを示している。

2 言語地図年代学は、歴史的な文献や古典文学などの書き言葉の資料、その他、古辞書などを引用しなくても、10年間隔で方言資料を収集し、言語地図化する

ることにより、言語の推移を解明することが出来る。また、20年間、変わらなかったという事実を見て、逆に変化速度がゼロであったと計算することが出来る。

3 言語地図年代学の有効性の一端を本稿で証明した。今後は、文法、語彙、アクセント、音韻の項目についても同様の比較言語地図学を試みたいと考えている。世界には、まだ、これと同様な試みは存在しないけれども、言語史を解釈する合理的な方法の一つと言えるのではなからうか。10年間隔で、2世代の言語調査を実施するのが理想である。しかし、それが困難だとすれば、5年間隔で全国を250地点ずつ調査してみてもどうだろうか。

2006年9月にポルトガルで開催された、第5回国際方言学者地理言語学会議で、江端がこの「方言地図年代学」の方法を発表した。今後、世界で江端の方法を追体験する試みがなされることであろう。